

センセーショナルリズムとモダニズム

—ミルドレッド・ギルマンの『ソブ・シスター』と ウィリアム・フォークナーの『サンクチュアリ』—

藤 野 功 一

序：「大いなる分断」とセレブリティ

2016年11月のアメリカ大統領選挙でのドナルド・トランプ大統領候補の勝利の後、多くの人々がアメリカを二つに大きく分断された国として論じた。¹たとえばジョン・S・ディッカーソンは、アメリカの分断された社会の一方には「進歩的な」アメリカ人がおり、そしてもう一方には「伝統的な」アメリカ人がいて、この二つがそれぞれ、ヒラリー・クリントン大統領候補に48パーセント、そしてドナルド・トランプ大統領候補に48パーセントの投票を行ったのだと分析している（細かく言えば、ヒラリー・クリントン大統領候補が6584万4610票を獲得し、ドナルド・トランプ大統領候補は6297万9636票を獲得。その差は286万4974票でヒラリー・クリントン大統領候補が獲得した票の方が多かったが、有権者の代表としてアメリカの大統領を選出する代理人である選挙人をより多く獲得したトランプ大統領候補が当選した²）。「進歩的な」アメリカ人は大都市に住み、大学を出ており、メディア、テクノロジー、教育などの知識産業に関わり、さほど宗教的ではない人々。その一方で、トランプに投票した「伝統的な」アメリカ人は、肉体労働に関わり、高学歴ではなく、田舎や郊外に住み、伝統的なキリスト教に深い信仰心を抱いている人々。多少の例外はあっても、ヒラリー・クリントンに投票したのは「進歩的な」アメリカ人であり、そして、ドナルド・トランプに投票したのは「伝統的な」アメリカ人であったとディッカーソンは論じる。そしてこの「伝統的な」アメリカ人は、トラン

プの人種差別的、あるいは女性蔑視の差別的な物言いにまで賛同していたというわけではない。むしろ彼らは、「進歩的な」アメリカ人にしてみると「人種差別的で、女性蔑視の輩」(a racist, sexist bigot) としか見えない彼の物議をかもし物言いにはさほど関心を払わずに、トランプの主張するアメリカの軍事的、経済的な優位と自由を守ることを強調する政策に惹かれたのだ、というのがディッカーソンの分析であった。³

ディッカーソンの議論は入念なりサーチと自らの経験に裏打ちされた説得力に満ちているが、ただし、彼の分析には、2016年の選挙活動の最中、支持率ではほとんどの時点でヒラリー・クリントン大統領候補に劣っていたトランプが、なぜ最後には彼女との接戦を制するに足るまでの支持をみつめる大統領候補となったのかについての考察が欠けているだろう。ディッカーソンは「伝統的な」アメリカ人たちはトランプの人種差別と女性蔑視に満ちた言動を重要視しなかったと考えているが、むしろトランプの主張を多くの「伝統的な」アメリカ人たちにまで届ける手段となったのが、彼のセンセーショナルなまでの人種差別と女性蔑視に満ちた行動であったことを忘れてはならない。彼は世論を真つ二つに分断するような、物議を醸し出す言動によって、かえって衆目を集めるセレブリティとなることができた。

2017年1月21日に行われた大統領就任演説で、トランプが声高に主張した「アメリカ第一」主義という言葉に、はっきりとした政治的信念があるわけではない。むしろビジネスマンとしての経歴を持つ彼は自分と自国のために利益をあげられそうな相手となら誰とでも手を組み、あるいはまた誰とでも争いを起こそうとするだろう。今後、ロシアと手を組もうとするかもしれないし、あるいはメキシコと国交を断絶すると言いだすかもしれない。明日彼が何をするかは誰にもわからないが、どうあれそれらの行動は自分への注目を集める手段であり、そしてまたアメリカへの利益を誘導しようとして行われるパフォーマンスである。彼はあえて人々の対立をあおるような論点に注目してそれを大々的に取り上げるが、そこに原則はない。彼は時にマスメディアを批判し、不法移民を批判し、オバマ前大統領の政策を批判する。彼が過去に人種差別的、女性差別的な言説を弄したのも、そうすることで、自分の言葉に対する人々の意見

が大きく対立することを彼が知っているからだ。世論は動揺し、不安に駆られた人々は文字どおりトランプの一举一動に注目し、あるいはトランプの顔色を伺いさえしはじめる。皮肉なことに、この過程の中でトランプの自国中心、自己中心のメッセージはかえって人種、性別、階級を超えて届くことになる。世界がトランプに注目する、それこそ彼が望んでいたことであり、物議を醸し出す言動は彼がセレブリティとして常にアメリカのメディアの中心にその座を占めるための戦略なのだろう。

ここで注目したいのは、トランプが大統領選挙において行った戦略は、ほぼ100年前にモダニズム文学の作家たちが文化的セレブリティとなるためにとった戦略と同じであったという点だ。ここ三十年ほどのモダニズム研究、たとえばアンドレアス・ヒュイッセンの『大いなる分断の後で』(1986)やウォルター・ベン・マイケルズの『我らがアメリカ』(1995)、ロレン・グラスの『作家産業』(2004)、アーロン・ジャフェの『モダニズムとセレブリティ文化』(2005)、トーマス・W・ギャロウの『セレブリティの作家たち』(2011)などは、モダニズム文学の担い手たちが、文化的セレブリティになるためにとった様々な戦略に注目している。一見すると金と名声に無関心であり、低俗な文化を軽蔑して、権威のある高尚な文化を目指したモダニズム作家たちは、実際には「19世紀から20世紀への転換期において・・・大衆文化を女性向けのものとみなし、大衆は女性によって占められていると考え、その一方で高尚な文化は、それが伝統的なものであれ現代のものであれ、明らかに男性の活躍する場を提供し続けている」(Huysen 47) という一般的に広く行き渡った認識を利用して、高尚な文化における男性作家の優位を強調した。あるいはまた、ヘミングウェイの『日はまた昇る』におけるユダヤ人差別の言説のように「新たな人種差別の形式」(Michaels 141) を作り出した。特にグラス以降の研究は、モダニズム作家たちが、センセーショナルな言動をあえて行うことによって、かえって「大衆に人気のあるセレブリティ」(pop celebrity) となり、「名声を得た大衆文化の典型」(mas cultural models of fame) となったことを明らかにしてきた(Glass 4)。モダニズム作家たちは彼らの名声を確立するためにメディアと大衆に注目されるような言動を行い、アメリカに深く根をおろす女性蔑視と人種差

別という問題をさらに悪化させるような言説を弄しながら、彼らの社会的地位を高めもしたのだ。モダニズム作家たちもその意味ではメディアを利用し、アメリカの分断を自らの名声のために利用したセレブリティたちだった。現在の「進歩的な」アメリカ人にとっては悪夢でしかないかもしれないが、トランプの勝利は、アメリカの時計の針を8年間巻き戻してオバマ大統領就任前の状態にまでしてしまったところか、「1世紀ほども巻き戻した」と論じたディッカーソンの分析は、あながち誇張とは言えないのだ。いわばトランプは100年前のモダニズム作家たちの「進歩的な」手法を再演しているのである。

ただし、だからと言って、トランプのメディアを意識した言動とモダニズム作家たちの言説を完全に同一視しようというのではない。モダニズム文学の価値の一つは、たとえそれが大衆とメディアを利用しつつ生み出されたものであるにせよ、作家が、人間がメディアを動かしているのではなく、むしろメディアによって動かされていることに危機意識を覚え、自省的にメディアと向き合い、その作品を展開させていったという点にある。社会的に見れば、名声を得たモダニズム作家たちは文化的セレブリティとして、その肖像写真や言動が様々な形でメディアに流通することとなったが、彼らはメディアの中に映し出され、人々の間に流通する自分たち自身の姿を客観的に見据えることを忘れなかった。むしろモダニズム作家はその作品において、自分を含めた人々の意識に浸透し、人間を否応なく動かしているメディアそのものを対象化しうる芸術的形式を探ったのである。時に女性蔑視や人種差別をあからさまに示しながらも、モダニズム文学は、常に大衆も、そしてまた自分も含めて、人間の感覚、行動、思想が、メディアを通じてどのように拡大されるのか、そしてまた、そのようなメディアに人々はどうのように惹かれてゆくのかについての考察を深めた。もしも現在、私たちがトランプのセンセーショナルな言説に惑わされることなく、彼の言動とそれを伝えるメディアとの関係を冷静に見据えようと考えることができているとすれば、それは私たちがモダニズム文学の遺産を受け継いでいるからだとも言えるだろう。

この論文では、現在のアメリカのメディアを考察するためにいまだに有効な作品として、1920年代の消費と情報の拡大が「加速」し続けた時代が曲がり角

を迎え、1929年の株価の大暴落に始まる社会恐慌が社会全体を飲み込もうとしつつあった1931年に書かれた二つの作品、ミルドレッド・ギルマンの『ソブ・シスター』と、ウィリアム・フォークナーの『サンクチュアリ』をとり上げ、モダニズムとメディアとの関係を考察したい。1931年は、ダグラスが述べたように、ヘンリー・アダムスがその死後に出版してベストセラーになった自伝『ヘンリー・アダムスの教育』の中で用いられた用語「加速」⁴が、ジェームズ・トラスロー・アダムズの『現代生活の速度』で改めて紹介されることによってより広く知られるようになった年でもある。⁵

のちに大衆文学の一つとして文学史の中に埋もれてゆくギルマンの『ソブ・シスター』と、モダニズム文学の一つとして高く評価されてゆくフォークナーの『サンクチュアリ』という同時代の二作品をあらためて比較することは、1930年代初頭のアメロカにおけるメディアの状況が大衆小説とモダニズム小説を生み出してゆく具体的な過程を検証することでもあるだろう。この二つの小説はどちらもメディアを主題としており、広く読者に売れる作品として、華々しく広告された作品であった。ギルマンの『ソブ・シスター』とその作者が、大衆紙というメディアの第一線で活躍する女性を描きながら、結局は、メディアはむしろ人間によって操作できるものという幻想を助長することで、当時のその他多くの娯楽映画、大衆小説と同じ結論を示しているのに対し、フォークナーの『サンクチュアリ』は、すでに誰もがメディアの影響を逃れることができず、人々が常にメディアを意識し、行動していることを示している点で、のちにモダニズム文学として評価される内容を備えていたことを論じてみたい。

1. メディアを操作しようとする『ソブ・シスター』の女性主人公

まずはギルマンの小説『ソブ・シスター』において、どのようにメディアが女性主人公の行動と関わっているかを見てゆこう。1920年代から30年代にかけて、当時のアメリカのジャーナリズムでは、女性記者がセンセーショナルな事件をいわゆる「女らしい」視点から報道して読者の関心を引く記事が、しばしば新聞の一面を飾るようになっていた。ギルマンが『ソブ・シスター』の中で描き出したのは、多様化し、断片化してゆく社会の中で、その報道の内容

にセンチメンタルな感情を付与して、読者に口当たりの良い記事を提供し続けるお涙頂戴の女性記者ソブ・シスターの姿である。この小説はアメリカ文学史の中では今までほとんど注目されてこなかったが、最近の研究において、1920年代から30年代にかけて新聞の第一面フロントを飾る記事を書いた花形女性記者フロント・ガールに注目が集まる中で、ふたたび言及されるようになった。キャスリーン・A・ケアンズの『花形女性記者、1920-1950』(2003)、ジェーン・マリー・ルーツの『フロント・ページ・ガールズ』(2006)、あるいは20世紀大衆文化におけるジャーナリストのイメージの変遷を論じたマシュー・C・エーリックとジョー・サルツマンの『ヒーローと悪党』(2015)などの研究において、ギルマンの小説は、この時期の女性記者たちが大衆文化の中でどのように描かれてきたかをよく示す作品であり、ジャーナリストとして活躍する女性が、仕事を諦め、結婚して過程に収まることになるという、当時としてはよくある保守的な結末を示した大衆文学の一つとして捉えられている。

この小説の主人公のジェーン・レイは、大衆紙『クーリエ』の女性記者として活躍しており、男性記者と競ってスクープをものにし、扇情的な記事に仕立て上げる「ソブ・シスター」とよばれた女性記者の一人である。彼女は男性記者との競争に勝ち抜いて自分の職業記者の地位を保ってきたが、彼女は自分が人々に口当たりの良い記事を想像力を付け加えて作り出していることを自覚しており、「新聞記事は生々しい悲惨な人生の悲劇に想像力を混ぜ合わせて作られるものよ。・・・犯罪は魅力的で読みやすくないわ。読者はその魅力を朝のトーストと一緒に食べて、朝のコーヒーと一緒に飲み込むんですもの」(110)と考えている。ジェーンが生きている時代は、事実がメディアによって増幅され、さらには脚色さえされて人々の大量消費の欲望に答えていた時代として描かれる。彼女は、事実を増幅した虚構が拡大する大衆市場とメディアの要求にあったものとして価値を増してゆくことを知っているのだ。

そしてまた、彼女自身も、メディアによって誇張された人々の虚像にかえって心を惹かれ、それらを楽しむことで、男性記者との過酷な競争の現実を忘れようとする。仕事に疲れ果てたジェーンが映画雑誌をめくって、ひとときのあいだ仕事のことを忘れて心を癒やされる場面では、現在でもごく普通に見られ

る、メディアイメージに心惹かれる女性のごくありきたりな心理が上手く描かれていると言えるだろう。

ジェーンは映画雑誌をめくって、華々しい活躍を続けている若き女優たちの記事を読んだ。彼女は自分の心が晴れ晴れしてくるのを感じた。忙しさに目の回るような気持ちが薄れてきて、思考の流れが軽やかになってくる。すると、ヘマをやらかして大衆の心をつかみそこねた新進女優の記事が目にとびこんできた。彼女は5キロも太ってしまったのだ。次には写真がたくさん。美しい女優たちとハンサムな俳優たちがキスをしている有名なシーンが二十枚くらい並んでいる。どれも愛にみちあふれていて、しかも中身はからっぽ。こういった俳優たちがしていることは、自分が幼い頃に夢中になったごっこ遊びみたいなものだけど、こういったたぐいの写真のほうが、人に害を及ぼすこともないのだ。どうせカメラが向けられている時だけこうしているだけだってことを、誰もが知っているんだもの。(112)

雑誌の中でもはやされるセレブリティは、現実の存在からかけ離れた虚構であり、その虚構によって強調された男性らしさ、女性らしさが、かえって人々にわかりやすく受け入れられやすい幻想を作り出していることを、主人公は自覚している。だが、この小説では、マスメディアにおける脚色や、男性らしさや女性らしさの誇張は、現実の過酷さを一時的に忘れさせ、むしろみるものの思考を一時停止させる作用さえ果たすのであり、それゆえに現実には疲弊した女性主人公はまるでさすがのようにメディアの与える非現実的な刺激に没頭しようとする。

主人公は、もはや現実の世界で男性記者と競争し、取材した事実を誇張し、時間に追われるままに記事を書き飛ばす生活に疲れ果てているのであり、現実の人間関係でも、彼女はまるで逃げ場を求めるようにロマンティックな恋愛関係に惹かれてゆく。彼女はライバル紙である『ブレイド』の花形記者、ギャリー・ウェブスターに求婚され、彼女を疲弊させる貴社の職業から身を引いて、彼の妻となってほしいという願いに、強く心を動かされる。

そしてこの小説の後半では、メディアに取り上げられる対象となることの虚しさをジェーンが自覚し、ジャーナリストをやめてギャリーと結婚する過程が描かれる。彼女はギャングが引き起こした身代金目当ての事件を取材しようとして深入りしてしまい、とうとう自分も犯人のアジトで密造酒作りのギャングにつかまり、とらわれの身になり、ついには凌辱されそうになる。彼女は辛くもその危機から脱出することになるが、この事件の当事者となったことで彼女は一躍メディアによって注目される存在となってしまう。そうなってみてはじめて、彼女は自分自身が新聞に掲載されるようなセンセーショナルな記事の主人公になることは面白くも何ともないことだ、ということを実感する。そして彼女は「こんな記事のヒロインになることなんかまったくおもしろくもないわ、自分の所属する新聞の第一面に掲載されてさらし者にされるなんて。そんなことになったら、自分は大衆紙の読み物にされるために生まれついたつまらない人間の一員になってしまう」(293) と考える。事実を誇張するメディアの側に立つことも、そしてまた、メディアによって報道される存在となることにも幻滅した彼女は、この事件の後、ギャリーの妻となることを承諾する。ギャリーは自分の妻となる女性を取材しようとする記者を追い払い、誘拐から帰った後の疲れ果てた主人公の姿を撮らせず、明日再び、身支度を整えて撮影されるにふさわしい姿を撮らせるから、といってカメラマンを追い出してしまふ。

結局、エーリックとサルツマンが述べているように、この小説で、自分自身も元ジャーナリストでもあるギルマンは、たしかに「女性は男性と同じ劣悪な労働条件に置かれながら、それ以外にも様々な問題や重圧に耐えなければならない」という重要な社会問題を取り上げたのだが、結局、主人公が「結婚のために彼女の仕事を諦めるという、当時の女性記者を主題にした小説ではよくある結末」(63) を迎えることになった。ルーツとケアンも同じく、この作品を当時の女性記者を主題とした大衆小説の保守的な傾向を示した作品として言及している。

ただし、主人公とメディアとの関係に注目してこの結末をよく見ると、必ずしも主人公はメディアとの関わりを完全に失うことを望んではいない。むしろ彼女は結婚を決意する直前まで記者を辞めることに残念な気持ちを抱いており、

結婚して家庭に入ると「もう女のスカートが短くなろうが、長くなろうが、それが人々の道德心を乱そうが、乱すまいが、どうでもよくなるのね」と言い、そしてまた、「セレブリティーたちに会えなくなるなんて、きっとさみしくなるわ」(295)と言って、記者を辞めて、みずから人々の心をかき乱す報道をすることもなく、そしてまた、華やかな生活を誇示することでメディアの注目を浴びるセレブリティーに会うこともなくなることを嘆いている。ただ、それでもなお彼女がギャリーの妻として家庭に収まるのを選ぶのは、家庭の中にいれば、取材する側であれされる側であれ、これらの心を疲弊させるようなメディアの影響からは逃れられると信じるからだ。それどころか、この小説の結末では、家庭という安全な場所を確保しつつ、彼女は自分が当事者となった事件について語ることで、つかの間ではあってもメディアを操作する立場に立つことができる可能性さえ示される。この大衆小説の結末では、主人公は家庭の主婦という立場と、情報を自分の意のままに操る立場の両方を手に入れることに成功し、それに満足を覚えるのだ。ただし、ギルマンの小説では、このご都合主義的な結末にほとんど批判的な視点が与えられておらず、そのため、人々のあらゆる生活の側面に浸透してその情動を突き動かす存在としてのメディアを対象化することができていない点を見逃してはならないだろう。むしろメディアを人間によって制御可能なものであると示しているために、この小説は現代社会におけるメディアと人々との関係を捉え損ない、大衆小説の域を出ない作品となっている。

2. 『サンクチュアリ』においてメディアに惹かれるテンブル

メディアに惹かれ、また、メディアをみずから操るという幻想に惹かれる、という点では、フォークナーの『サンクチュアリ』に登場する女性主人公、テンブル・ドレイクも同様である。ただし、フォークナーの小説においては、人々がメディアの影響から逃れることのできる聖域はどこにもないことが示され、この小説は人々のあらゆる行動に影響を与えるメディアの影響が冷静に描き出されている。この小説の主人公のテンブルは『ソブ・シスター』の主人公と同様、密造酒作りのギャングに監禁されるという危機に陥るが、その後の顛末は

『ソブ・シスター』とは対照的である。テンプルは、密造酒作りのアジトに連れてこられ、性的不能のギャングであるポパイにトウモロコシの穂軸によって性的に暴行され、さらには売春宿に監禁されてしまう。しかし、暴力に脅されてポパイに従うあいだに、テンプルはポパイに強く惹かれ始め、たとえポパイの監禁から脱出する機会があっても、そのせっきくの機会を利用して逃げ出すことさえしなくなる。彼女はポパイが周囲に及ぼす力に魅了され、ポパイの力の象徴であるピストルに触りたがり、彼を自分にとっての新たな父親的存在であるかのように「パパ」(Daddy) とためらいなく呼び始める (236)。⁶

テンプルはなぜポパイに惹かれるのだろうか。もしも、マスメディアだけをメディアと考えず、マクルーハンが彼の『メディア論』で、「感覚と能力の外的な拡張」(211) そのものをメディアと呼び、人間の感覚を拡張する外的な道具、すなわち、言葉や新聞雑誌ばかりでなく、着る服、自動車、電報、電話、そして武器などもすべてメディアとして論じたことを思い返せば、ポパイは彼自身の感覚の拡張をメディアによって成し遂げている人物だと言っていいだろう。ポパイは、他人を傷つけ、おとしめる目的であるにせよ、自己を拡張するメディアを使って新たな感覚を他人に与える存在として描かれている。小説の中でトウモロコシの穂軸を使って女性に性的暴行を加える、他人であるレッドの身体を使ってテンプルを犯させる、あるいはピストルによって人々に従わせる、あるいは毎年夏になると、わざわざペンサコーラまで母親に会いに行くことで親孝行な男という評判を維持する、それらはすべて自分の身体の延長として様々なメディア、つまりトウモロコシの穂軸、部下のレッド、ピストル、自分の母親さえも道具として用いて自分の存在を増幅させ、それによって生じる世界の反応を自分の存在に織り込むために行われる。この小説では、ありきたりな日常にそれまでにない感覚と能力の拡張を持ち込んでくれる存在であれば、なんであれ人々は魅力を感じてしまうものだということが示され、ポパイの行動に、周囲の登場人物も、また、読者も翻弄されることになる。

さらにマクルーハンの言うように、人間そのものがメディアに新しい形式を受胎させる「いわば生殖器」(47) となるなら、ポパイのように、性愛の代償行為のようにメディアを操る人物やそれを愛する人物が現れても不思議はないだ

ろう。『サンクチュアリ』で描かれるのは、メディアによる能力の拡張をあたかもみずからの性的な魅力を体現するかのようにはる舞うポパイと、彼の行為に魅了される周囲の登場人物たちである。いままでの批評史のなかでも、たとえばクリアンス・ブルックスは、ポパイというギャングは「気だるい田舎、腐敗した役人、そして恐怖に麻痺させられた一般市民が、彼を刑罰から逃れさせる」ので、「魔力のかかったような生き方」(118)をしていると評し、プレストン・ロウターバックはその周囲に影響力を及ぼす力をポパイの「ミステリアスな力」(184)と呼んだ。あるいはクリスタル・ゴーハム・ドスはポパイは性的不能であるにもかかわらず、男性として尊敬される存在となっていると考え、ポパイは「尊敬すべき男らしさを恐ろしい悪夢」(83)に仕立て上げられた存在だと論じているが、その背景には、1931年ごろ、すでにメディアによる個人の存在の拡張とそれによってもたらされる新しい感覚に人々が魅了されるという現実が十分に人々の間に浸透していた事実があったと言えるだろう。たとえ性的不能であっても、自分の男らしさを訴えかけるポパイは、メディアを利用してみずからの能力を拡張する力によって周囲の人間を魅了していると言えるかもしれない。

この小説を、ギルマンの小説『ソブ・シスター』と同じ年に、同じ出版社から出された作品として読み直すと、templが彼女に暴力的なまでの支配力を振るうポパイに惹かれるさまは、『ソブ・シスター』において劣悪な労働条件の中で女主人公が疲弊しながらも、メディアに惹かれ、離れることができない状況と同じ構造をなしていることがわかる。どちらの場合も、メディア（あるいはメディアを使ってみずからの力を拡張するポパイ）は、人間の能力や感覚を拡張し、人々に影響を及ぼすという力により、女性主人公を魅了する。女性主人公は、たとえそれに惹かれることがみずからの犠牲を伴うとしても、メディア（あるいはポパイ）に近づこうとし、そしてみずからもその能力や感覚の拡張を楽しもうとする。

大衆文学である『ソブ・シスター』においては、メディアを操る立場に立つ満足感、女性主人公が家庭の主婦に収まりながら、しかもなお犯罪に巻き込まれた証人として他の記者に対して優位な立場に立つという大団円の中で描か

れるため、女性主人公が最後までメディアに惹かれる状態であることに批判的な視点が向けられることはない。しかし一方の『サンクチュアリ』では、テンブルがみずから犯罪に巻き込まれた情報を他者に開示するときを感じる優越感がおぞましい快樂として描かれる。売春宿に監禁されたテンブルを救いにやってきた弁護士のアリス・ベンボウに対して、テンブルは、みずからがトウモロコシの穂軸で犯された経験を回想して語る。彼女はそのとき、みずからの語りというメディアによって、他者へと影響を及ぼす立場に立つことに誇りを持つ。そのときにアリスは、テンブルが「女たちが自分は舞台の中心に立っていると自覚したときによくやる、あのはなやいだおしゃべりのようなひとりごとのたぐい」を喋っているのだと気がつく（216）。テンブルはあたかも自分が舞台の上に立ったような陶酔を覚え、さらに彼女はその回想の中で、「ボンという音」をたてて、「まるでちっちゃなゴム管を裏返しにして、息を吹き込んで膨らませたときみたい」に、自分に男性器がつけ加わったような感覚があったと語る（220）。実際にはテンブルは自分の生殖器の感覚を述べているだけなのかもしれないが、むしろここではテンブルの男性への性転換という夢想到に託して、みずから言葉というメディアを使って優位に立っている状態を、彼女なりの言葉で語っているのだ、と解釈しても良いだろう。若い彼女の妄想じみた回想の中で、テンブルは、自分の経験を拡大再生産して伝えることに大きな満足を感じており、それはあたかも自分が男性となり、優位な立場に立ったかのような感覚を彼女にもたらし。

ポパイから性的暴行を受けた経験を、みずから語る過程で、テンブルはポパイに対して優位に立つ人間となろうとして、最初は中年女性の「学校の先生みたい」になり、次には「白い顎ひげをたらしたお爺さん」となり、ついには「男」となる（219-20）。テンブルの妄想は、言葉というメディアの目的が、その本来の目的である伝達という機能を忘れて、単に他者に対して何らかの優位に立ち、力を振おうとする手段となるとき、いかに無原則となり、そしてまた事実から遠のいて行くかを如実に示している。この告白の場面で語られる妄想じみた言葉こそが、テンブルがポパイとの関係の中で学んだメディアの使い方の実践であるだろう。

みずからの語りに耽溺するテンプルとは対照的に、19世紀的なロマンティズムを引きずり、言葉と事実とが不即不離の関係であることを信じる弁護士のホテルスは、このようなテンプルの無原則で、破廉恥なまでに恣意的な言葉というメディアの使いぶりに深い嫌悪感を覚え、ポパイの支配下に置かれて密造酒に耽溺するテンプルを売春宿から救い出すこともできずに、売春宿を後にする。言葉が倫理的な原則などというものとは全く無関係に他者に影響を与える一つのメディアとして用いられ、その状況の中にあらゆる人々が生きているという実態を、ホテルスはテンプルの言葉から改めて悟る。ホテルスは帰り際にふと男女が路地の傍で言葉を交わしているのを目にする。暗がりですら「男が活字にはできないような形容詞を次から次へと低い声で愛撫するようにささやき、女は男の前に立ってじっと動かず、官能的な恍惚感に酔いしれている」様子は、言葉の乱用に対するホテルスの認識をさらに強める(221)。そしてホテルスは、ただ他人に対する効果のみを狙って、次から次へと生み出される言葉というものが、悪というものへと至る「論理的な型」^{パターン}になっているのだと考える(221)。ホテルスはその後、コーヒーを一杯飲むのだが、テンプルの言葉に打ちのめされた彼は、そのコーヒーを消化することができず、帰った自宅の便所でコーヒーを吐く。

この場面で出てくるコーヒーの役割は、『ソブ・シスター』の中に登場するコーヒーの役割とは対照的だ。すでに見たように、『ソブ・シスター』の中では、女性記者の主人公が犯罪を魅力的で読みやすい記事に仕立て上げて、公衆がその魅力を「朝のトーストと一緒に食べて、コーヒーと一緒に飲み込む」(110)のだと描写される。ギルマンの大衆小説において、コーヒーが事実を誇張した言葉を飲み込む小道具として用いられるのに対して、『サンクチュアリ』で吐き出されるコーヒーは、テンプルによって誇張された言葉をホテルスが受け付けることができないことを示している。事実の粉飾や歪曲に満ちた言葉を、コーヒーとともにその身体に受け入れ、消化するという行為は『ソブ・シスター』ではごく一般に行われる現代的な行為として描写されるが、それとは対照的に『サンクチュアリ』では、そのような行為を受け入れることができない登場人物を描くことで、一般に広く受け入れられた言葉というメディアのあり方に対する危機意識が示される。

templumにとって、言葉は事実を伝達するものではなく、むしろその場における人間同士の力関係をさらに誇張して示すものである。templumは裁判において、地方検事の言いなりとなって、自分をトウモロコシの穂軸で犯したのは黒人のグッドウィンだという偽証をおこない、犯罪とは無関係の黒人に罪を着せる。templumは社会的な力関係をそのまま反映した裁判所の言説に従うままに、社会的な弱者である黒人のグッドウィンを犯人に仕立て上げるが、彼女に罪の意識は見られない。むしろ彼女は、「少し離れたところから眺めると、その二つの目と頬紅の二つの丸と口は、小さなハート形の皿に置かれた五つの無意味な物体のように」見え(286)、彼女はむしろ裁判所に満ちた歪んだ言説に従って動く人形のようにさえ思われる。templumは、自らの意思で動くというよりは、むしろ人々の用いるメディアが及ぼす様々な社会的効果に従って行動する存在として描写される。そしてホレスは、他人に対する効果のみを狙って繰り出される言葉を軽蔑して、かえって事実には固執するあまりに、人々を説得する言葉を話すことができず、グッドウィンが冤罪を被ることをむぎむぎと許してしまう。ホレスもまた、拡大する言葉の効果にまきこまれ、それをおしとどめることなどできない存在であることが示される。

templumにとって関心があるのは、自己のありのままの姿よりも、むしろ自分の能力と感覚を拡大してくれるメディアの方だ。この小説の最後の場面において、父親はtemplumを南部の片田舎から連れ出し、パリに滞在させる。リュクサンブール公園のベンチに座りながら、templumは音楽に耳を傾ける。

管楽器がひとときわ凄まじく豊かに鳴り響き、彼らの上へ悲しみの大波となって打ち寄せ、やがて緑濃い黄昏の闇の中に消えていった。templumは口に手をあてがってあくびをすると、コンパクトを取り出して開き、不機嫌な、不満そうな、悲しげな顔を鏡に小さく映した。・・・彼女はコンパクトを閉じ、洒落た新しい帽子の下から、目で音楽の波を追い、消えゆく管楽器の音にとけこみながら、汚れた大理石の女神像が、生命なく静かに物思いに耽る、半円形に木々の立ち並ぶあたりを超え、さらに、雨と死の季節の抱擁に征服されて、うつぶしている空へと、その視線を移していくものようであっ

た。(317)

コンパクトの鏡に映る自分の顔にほとんど興味を示さないテンブルは、もはや自分を映し出す自己のナルシスティックな鏡像に満足することはないことが示される。むしろ彼女は自分の周囲で奏でられるメディアである音楽に引かれ、それを目で追う。この小説の最後の場面におけるテンブルの描写に、メディアによって扇動される現代社会へのフォークナーの批判的なまなざしを見るのは容易だろう。

3. ギルマンとフォークナー

モダニズム文学はしばしば、差別的な言説を弄する芸術形式であった。フォークナーの『サンクチュアリ』における、テンブルの描写は、たとえそれが現代まで続くメディアの影響下にある人物を描く寓意であると考えても、読者を女性蔑視へと強く誘導するものとなっている。あるいはまたグッドウィンが犯人に仕立て上げられてゆく過程は、読者がその背後にある南部の片田舎の偏狭な人種差別の感覚を共有しなければ、到底理解できないものだ。ヒュイツェン、グラス、ギャロウが述べるように、そもそもモダニズム文学は19世紀以来の、大衆文学を女性的なものとしておとしめ、高尚な文学を男性の活躍する場として考えるという文化的土壌を引き継いだものだと考えられるのであるなら、フォークナーとその作品に見られる女性蔑視も歴史的必然性のあるものだと考えるかもしれない。また、マイケルズが「他者排斥のモダニズム」(nativist modernism) という用語で提案したように、モダニズムがかえって「新たな人種差別の形式を発明」してしまったことを、フォークナーの小説もまた、あからさまに示しているだろう(141)。メイソン・ストークスは「もしもアメリカ文学が、そして私たちのアメリカ文学研究が、実際のところアメリカの人種差別に手を貸すような構造的共犯関係を結んでいるとしたら、我々はそれをどう考えれば良いのだろうか」(10)と論じた。我々がモダニズム文学をアメリカ文学の中心にあるものとして論じるとき、それが結局、アメリカの文化の中に常に居座る、女性蔑視と人種差別を助長することと共犯関係にあるのではないか、

という疑問は、常にアメリカ文学を研究するものが自問しなければならない問いであるだろう。

だが、モダニズム文学を、単に女性蔑視と人種差別に満ちた偏狭な態度が生み出したものとして捉えると、かえってモダニズム文学というジャンルそのものが持つ多様性に目をつぶってしまうことになることも事実だ。そもそも、アメリカのモダニズム文学の創始には女性作家であるガートルード・スタインが関わり、そしてモダニズム文学の技法の発展には、すでに20世紀前半から、多くの黒人作家も寄与している。現在では、フェイ・ハミルが論じたように、今までモダニズム文学の領域から外されてきた女性作家とその作品、たとえば『ニューヨーカー』をはじめ多くの雑誌に短編を発表したドロシー・パーカーや、話題作『紳士は金髪がお好き』によって一躍有名となったアニータ・ルースなども、モダニズム文学として評価しようとする動きもある。また、モダニズム運動は、のちにまさに大衆をその主題として取り組んだジョン・スタインベックの『怒りの葡萄』や、あるいはジェームズ・アージーと写真家ウォーカー・エヴァンズによる『さあ有名人をたたえよう』を生み出すことにもなった。あるいはまた、女性黒人作家であるトニ・モリソンは、フォークナーの文学的遺産を受け継ぎ、その文学世界を発展させてきた。モダニズム文学のこれらの多様な広がりを見ると、もはやモダニズム文学を、単に女性蔑視と人種差別との共犯関係にある文学として捉えようというのは、いささかむりがあるだろう。

むしろ、モダニズム文学は、広く情報を伝達するメディアをその活動の中で鮮明に意識化した運動であり、その結果、社会の動向に極めて鋭敏な芸術形態となったと考えたほうが良いかもしれない。モダニズム文学は社会の関心がどこに向かっており、そしてまた、その時代に何が問題であるのかを鋭利に指し示した芸術形式であった。その関心はメディアに関わるあらゆる範囲に及ぶために、そこにはポリシーも、世界観も、ましてや理想などというものはない。むしろトンプキンスが言うように、モダニズム作家は、文学というものは何ら目指すべき世界観などというものを持たない「一種の言説の形式」だと考えていたと言うべきだろう (125)。むしろモダニズム作家は、メディアに対して鋭敏な感覚を持つがゆえに、ときにはその作家がセレブリティとなり、ときには

センセーショナルな言動によって人々の注目を集める存在とさえなつたと考えたほうがよいのではないだろうか。

このような観点から見ると、フォークナーのメディアに対する態度は、十分にモダニズム作家に値するものだっただろう。フォークナーは1932年、『サンクチュアリ』がエヴリマン・ライブラリーから再販されるにあたって、メディアを十分に意識して、この作品はもともと「安っぽいアイデア」であり、「金のために書いた」という内容の有名な序文を新しく付け加える(321-22)。『響きと怒り』や『死の床に横たわりて』といった高尚な作品を書いた作者が意外にも金のことを口にし、さらに『サンクチュアリ』はもともと出版社が出版を断るほどの内容であったことなどを告白して、マスメディアの好むゴシップ的な要素を十分に含んだこの序文は、すぐさま書評の書き手によって引用される言葉となった。たとえば1932年6月19日の『ソルト・レイク・トリビューン』の書評は、フォークナーの『サンクチュアリ』をロングフェローの詩集とベンジャミン・フランクリンの『自伝』と並ぶ「一流の作者」による作品であるという言葉とともに紹介している。さらに書評子はこの新しい序文の冒頭の有名な部分「この本は3年前に書かれた。私にとって、それは安っぽい思いつきのもとに、金儲けをしようとして生まれた作品だった」という部分を直接引用したあとにつづけて、フォークナーが序文に書いた内容をほぼそのまま繰り返し、フォークナーが想像しうる限りの恐ろしい話を考えついて、それを三週間で書き上げたこと、そしてのちに、原稿を持ち込んだ出版社が到底これを出版することはできないと断ったこと、そして出版するために原稿をすっかり書き直したことを伝えている(3)。こうしてフォークナーは、みずから新たに加えた序文によって、自分が想像力の限界に挑戦する作家であること、そしてまた、それをさらに出版社の求めに応じて書き直し、質を高める能力があること、自分がメディアのなかで増幅する効果を考慮しながら作品を完成させる作家であることを示した。さらにはフォークナーの有名な「序文」はその後の批評に大きな影響を与えることになった。ダグラス・J・カンフィールドが論じるように、「その後のこの作品の批評分析のほとんどがこの序文から論じ始めるようになってしまい、さらにはこの序文で言っていたことの要旨をフォークナー自身がそ

の後のインタビューで何度も繰り返してしまったことが、『サンクチュアリ』の批評がその本質から注意をそらす最大の原因となってしまった」(2)とも言えるだろう。

フォークナーは『サンクチュアリ』の序文の内容をその後も様々なインタビューで繰り返す。それはこの序文の内容が、メディアの上で拡大再生産されるのに適切な言葉であったことを自覚していたからだろう。グラスも言うように、実際のところ、「失われた作家たち」は、その芸術においてはT・S・エリオットが言うような「没個性」的な美学を志向する一方、「大衆文化の中での名声を維持するのに十分な噂話になりそうな作家自身についてのゴシップネタを投下することで、アメリカの大衆文化の本流に顔を出し続けた」(5)のである。モダニズム作家は、作者個人がメディアの中でセレブリティのように扱われることに軽蔑を示しながらも、実際には大衆の噂になるような作者の個人的な来歴を意図的に明かし、大衆文化のなかでの作者の社会的地位を確立してきた。フォークナーも、その意味ではメディアに対して、モダニズム作家として典型的な振る舞いをしたとも言えるだろう。

いっぽう、ギルマンはその後に出版した作品において、マスメディアを意識した言葉を語ったり、あるいはマスメディアを意識した作品を出版することに必ずしも成功しなかったようだ。『ソブ・シスター』を発表してから1年後の1932年、彼女は『二人への愛』(*Love for Two*)という題名の小説を発表するが、この作品は、彼女の生活をありのままに映し出した作品という印象を与えた。ある書評は、ギルマンの才能は、自分の生活をありのままに記述する才能で、そこで描かれるのは「平凡で安っぽい出来事」(a rather prosy and tawdry affair)でしかないと酷評している(Holfed 3)。

これは『ソブ・シスター』の小説の結末からの当然の帰結かもしれない。『ソブ・シスター』の主人公は自分の生活がメディアによって増幅することに疲れ果て、夫となった敏腕記者ギャリーの庇護のもとに家庭の中へと退却することになった。ギルマンにとって、家庭生活がメディアにおける現実の増幅とは無縁である以上、彼女が自分の私生活をモデルに描く家庭小説においては、『ソブ・シスター』でギルマンが描き出すことができていた最も魅力的で現代的な

要素である、メディアによる現実の増幅とそれが主人公に影響を与える状況が描かれないことになる。彼女の私生活の記述は個人の生活への興味をかき立てるかもしれないが、かえって、現代を生きる個人がどのようにメディアとかわっているかについての作者の考察を、ギルマンの作品から聞けなくさせてしまった。

結論：メディアの中の作家と作品

道具や書きもの、あるいは車といった、自分の感覚と能力を拡張してくれるものを愛する感覚。この、人間にとっては古くから慣れ親しんだメディアへの愛が一気に加速し、同時に、膨張するメディアに対する危機感もまた強く意識された時代が、1910年代末から1930年代の初頭であった。アン・ダグラスが述べたように、アメリカはこの時代に「大量生産がその生産物の消費を加速させるのとおなじように、メディアが情報を加速させる国」(191)となった。市場と情報の拡大が高尚な文化と低俗な文化の両方を飲み込み、さらには人間の身体とその属性、たとえば性別その他の肉体的特徴までもが拡大再生産をくりかえすメディアのなかで認識されはじめる。この時代に、アメリカはもっとも「劇場化」(Ann Douglas 55)し、世の中のあらゆる出来事が大げさに増幅されて示され、大衆はそれまで思ってもみなかった速度で、より多くのものを求めるようになる。新聞や雑誌はより扇情的になり、H・L・メンケンがすでに1922年に的確に嘆いてみせたように「アメリカの大衆の趣味の低劣さは底が知れない」(George H. Douglas 90)ものになっていった。この時代の文学作品もまた、大衆文学としてそうした世の中の動きに迎合するにせよ、あるいは高尚な文学としてその趨勢に批判的な眼差しを向けるにせよ、低きに流れる「大衆の趣味」のただなかから生まれざるを得なかった。そしてまた、トランプ大統領の誕生を目の当たりにした私たちは、人々が注目し、世論を分断する論点を言い立てるといふ扇情的な戦略がいまだに有効であることを認めざるをえない状況にいる。

大衆文化とともにモダニズムが成立した1910年代末から1930年代初頭は、作家がもはや拡大再生産するメディアとの関わりの鋭い意識なしには作品を成

立させることができなくなった時代だとも言えるだろう。そして作品におけるメディアに対する批評的態度が、のちにそれをモダニズム作品として評価するか否かを判断する重要な要素の一つとなった。20世紀の大量消費とメディアによる現実の拡張が生活のあらゆる面に入り込むなかで、依然としてギルマンの大衆小説は、家庭を神聖化し、そこではありのままの自己が回復するという神話を再生産してしまった。そしてその後の作品でも依然としてありのままの現実としての家庭内の生活を描こうとして、かえってみずからの文学の新しさを失っていった。それに対して、フォークナーはそれとはべつの道を選び、『サンクチュアリ』によって大衆市場の中で作家としての自己を確立する際には、むしろマスメディアの中で増幅する自分の言葉をいかに語るかに神経を注いだ。1931年に出版されたギルマンの作品が大衆文学として文学史の中に埋もれて行き、フォークナーの作品がモダニズム作品の一つとして高い評価を得るようになった歴史的経緯は、同時に、この時代以降の作者と作品が、常に様々なメディアによって増幅されている現実のなかから生まれるほかなくなったことを示している。

¹ Arnade の記事、および The New York Times の “Red, Blue and Divided: Six Views of America” を参照。

² Begley の記事を参照。

³ Dickerson の記事を参照。

⁴ Henry Adams, p.435 を参照。

⁵ James Truslow Adams, p.78 を参照。

⁶ 『サンクチュアリ』からの引用は、Sanctuary (New York: Vintage, 1993) に拠り、これ以降この作品からの引用は本文中に頁数のみを記す。なお訳語は、西川正身訳『サンクチュアリ』(中央公論社)を参考にさせていただいた。

Works Cited

- Adams, Henry. *The Education of Henry Adams*. Washington, 1907. *Internet Archive*. 30 Jan. 2017 <<https://archive.org/details/educationofhenry00adamrich>>
- Adams, James Truslow. New York: Albert, 1931. *Internet Archive*. 30 Jan. 2017 <<https://archive.org/details/tempoofmodernlif00adamrich>>
- Arnade, Chris. “Divided by Morality?” 22 Dec. 2016. 15 Jan. 2017. <<https://medium>.

- com/@Chris_arnade/divided-by-morality-3030d790b2b8#.gqxi4lyhf>
- Begley, Sarah. "Hillary Clinton Leads by 2.8 Million in Final Popular Vote Count." *Time*. 21 Dec. 2016. 15 Jan. 2017 <<http://time.com/4608555/hillary-clinton-popular-vote-final/>>
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha County*. 1963. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1990. Print.
- Cairns, Kathleen A. *Front-page Women Journalists, 1920-1950*. Lincoln: U of Nebraska P, 2003. Print.
- Canfield, J. Douglas. Introduction. *Twentieth Century Interpretations of Sanctuary: A Collection of Critical Essays*. Ed. J. Douglas Canfield. New Jersey: Prentice-Hall, 1982. Print.
- Dickerson, John S. "How to Unite a Divided America" *CNN*. 13 Nov. 2016. 15 Jan. 2017 <<http://edition.cnn.com/2016/11/13/opinions/two-americas-call-diplomacy-dickerson/>>
- Doss, Crystal Gorham. "Put a Mississippian in Alcohol and You Have a Gentleman: Respectable Manhood in William Faulkner's Sanctuary." *Faulkner Journal* 27.2 (2013): 77-89. *Academic Search Complete*. Web. 5 Feb. 2016.
- Douglas, Ann. *Terrible Honesty: Mongrel Manhattan in the 1920s*. London: Papermac, 1997. Print.
- Ehrlich, Matthew C. and Joe Saltzman. *Heroes and Scoundrels: The Image of the Journalist in Popular Culture*. Urbana: U of Illinois P, 2015. Print.
- Faulkner, William. *Sanctuary*. 1931. New York: Vintage, 1993. Print.
- Galow, Timotny W. *Writing Celebrity: Stein, Fitzgerald, and the Modern(ist) Art of Self-Fashioning*. New York: Palgrave Macmillan, 2011. Print.
- Gilman, Mildred. *Sob Sister*. New York: Jonathan Cape and Harrison Smith, 1931. Print.
- Glass, Loren. *Authors Inc. Literary Celebrity in the Modern United States, 1880-1980*. New York: New York UP, 2004. Print.
- Hammill, Faye. *Women, Celebrity, and Literary Culture between the Wars*. Austin: U of Texas Press, 2007. Print.
- Holfed, Adeline. "Love for Two, By Mildred Gilman. Harrison Smith, \$2.00." *The Wisconsin State Journal* 1 May 1932: 3. *Newspaper Archive*. Web. 28 Feb. 2016.
- Huyssen, Andreas. *After the Great Divide: Modernism, Mass Culture, Postmodernism*. Bloomington: Indiana UP, 1986. Print.
- Jaffe, Aaron. *Modernism and the Culture of Celebrity*. Cambridge: Cambridge UP, 2005. Print.
- Lauterbach, Preston. "A Cheap Idea: How One Non-Faulkner Fan Found Sanctuary in the Non-Faulkner Book." *Virginia Quarterly Review*. 91.1 (2015): 176-85. *Academic Search Complete*. Web. 5 Feb. 2016.
- Lutes, Jean Marie. *Front-Page Girls: Women Journalists in American Culture and Fiction, 1880-1930*. Ithaca: Cornell UP, 2006. Print

- McLuhan, Marshall. *Understanding Media: The Extensions of Man*. Cambridge: MIT, 1994. Print.
- Michaels, Walter Benn. *Our America: Nativism, Modernism, and Pluralism*. Durham: Duke UP, 1995. Print.
- "Poet, Novelist and Philosopher Augment Library." *The Salt Lake Tribune* 19 June 1932: 3. *Newspaper Archive*. Web. 28 Feb. 2016.
- Polk, Noel. Afterword. *Sanctuary: The Original Text*. By William Faulkner. Ed. Noel Polk. New York: Random House, 1981. Print.
- "Red, Blue and Divided: Six Views of America" *The New York Times*. 13 Nov. 2016. 15 Jan. 2017 <https://www.nytimes.com/2016/11/14/us/red-blue-and-divided-six-views-of-america.html?_r=0>
- Stokes, Mason. *The Color of Sex: Whiteness, Heterosexuality, and the Fictions of White Supremacy*. Durham: Duke UP, 2001. Print.
- Tompkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860*. New York: Oxford UP, 1985. Print. (*Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860*)